續奇合部類

三

須賀廼舎之章

續哥合部類巻之十

日吉七社哥合　建久三年五月

大比叡十五番

小比叡十五番

聖真子十五番

八王子十五番

客人十五番

十禪師十五番

三宮十五番

吉野弘隆藏書

大比叡十五番

一番

左

志賀の浦は波まにうつる氷にそ乾のこゝに有明の月

右

いまも鶴の林に散花の白ゐてまかふ志賀の浦風

哥の道はあきつしまねまもる日の本

国のことよろこひ龍の御世まで

ぬるはしこきんか我らも詞をまなひ

諸ろとも申さんとりてあそひおもし

家の中にもいにしへよりの歌
道をおもへるかしこきおほくまたへ
まつへしいにしへゆるめりてハ柿本人丸
山邊赤人かれらありてハ在原業平
朝臣花山僧正并素性法師紀貫之
凡河内躬恒壬生忠岑かなう哥なはし
わりきそともやう人もやわりひらくへ
まさらん今の世にいふ哥をよみし
とふ尾なとしもあれ百人ハかゝる人
しかるにいま二百首の和哥を百首よ

りえらひて七乃秘れ寶のおまへにさため
十五首まてかきてまつる事あるを
てこゝろをわかつまさるとさためて
のへきよし此かの事旦ハかれと事
をよせ且ハ緒縁をたのむ志ありて
なすひ中いふ言ならぬへかれて
のおもひみぬ尾しる志らぬ
ぬして中世ハ既未得謂得未證謂證
の戒をかくのみかれハ神聖と
いひ緒縁といひ道のさまりて病

狗のからくれぐとろい鉾牛比凡とあ
はせばかりとろかすまるんのみしらき
詞すまゐて志るしやへきとまつ屋ら
祈るもくハ和光同塵がれわしましこに
照してみそなはせ玉ふさし杖ん事を
なんしこみてもゆるしいろ事在り
柳一番のつゐ左ハちしの峰乃秋
の月老ぬや右ハ鶴のとやしろの
あの花よりひとよりあめあ事を
天地春秋の花月いつもぞと勝と申す

きよらてお寸し凡とれ

二番

左　勝

志賀の浦よ西風を怪ひてわまてるもろいすへ(ぎ)

右

松風もなく浮世の民の家にて歌所押照の袖
無名乃哥いちしめのそりしなれ輪月
きみまりてお乃句まていこしくおし
いいものをたえ志うの浦乃なみの色よふ
翁まで心んちしていましへ乃わて

まちわひしも猶へくやゆらん

三番

左勝　立春

波まより春ハ霞も立田山来るやうも引かへらん

右　同題

吉野山春風の空ひさかたの枝にいたるらん

左ハ立田山来ぬ霞右ハ吉野山の春風

凡両方優し哥乃ともにしとこそみゆ

されとよハゆるさとなす左の来まてや年

もしと又今まはつるとやへくや侍らん

四番

左　やまぬくにほにほ花をとみんて

しき風府白ん花ハさきのこハあ風わかをそうつゝかな

右勝　出家の後花をとらんて

釋阿

雲井春そ受まちすまし花ハ今すまし思ふおもひ

左乃哥ハんかきりなく妙く花みく

猶も右乃方ニハ昔よりよろこひん

哥も首楞縁のさあ忠ましつてこそ

似ましれこの哥なしなる事侍らん

あらて花はみなうつりしてふる色もなく
よしとまつしくおりひなもひてまらし
たてまつりけるに侍ほたいさこうも
かはうつるよしうなくよやさよし
侍りしうはすゑ乃句はさもけしよろ
しきまや侍らんのえもくるしかいはら
はつ侍り

五番

左 持

更衣

ありて花の色もかへしとふる月とやさき衣哉

右

卯花

ふけぬるは橘のえに雲かゝる夜は卯の花垣に月やかくるゝ
右は卯乃顕る色とおもしぬこきたま
えしはおりてまた更衣すりませてまはり
まやもそ夜衣すみて侍りし侍しにおう
しくきても侍もえみさくる枝は雲かれし
そて卯花垣に月もとられんにはみしく
見えし侍おかなんこうはつれしを勝と
申はべりなん

六番

左 勝　秋の歌の中に

草まくら秋の夕を志のへはや野にも山にも露こほれけん

右　同

野邊の東草の袂は志ら露のつゆけき秋の夕なりけり

左の歌の哀もさることなからいつまても
まくらにおとしをまかせ侍れは
右乃歌ゆふくれの句のおもしろく侍れは
隔ても いひたる句は 秋の夕
いとゝ侍らぬ字ゆへしてみえ侍しと申
侍らぬまてハこゝとをねこしとも

侍れとこまやかにおもひてたまはれ　れ
とゝし

七番

左 勝　大家にて題を

照月光としといふ事をさへてとを山の端る

右　月前の紀来大獄とのさしとて

太宰府の峯の風に霧はれていつみの月は清ぬ

峯の嵐に霧もはれていとゝ

かゝみの山さそこはもえ秋の月かけ光と

苔まもるかきりて音まへもとあらしに山

川乃気しきさもなくや侍らん

八番

左持　月の前の花

月影の入ぬる跡に思ふかなさそふ嵐の花の東雲

右　同

うつしてし様にもなとてはいかん花に嵐の月

花の前の哥又入ぬるあとを思ふに

とひさるさる山の端月に侍るを

へこすまぬれして及かたく侍りて

持にや申へき

九番

左勝　花の前の月

まつ見ぬ青葉の雲井につきたる月このもとはさそふ嵐も

右　同

霜(?)の月の前の花の色をとこそ侍るの前に侍らて

きの哥青葉のさきに雲井の月に侍るに

へはうくれりし風に侍るもあの色に侍る

もはかまに石の合はそも侍るを同位

ともし上人も見て侍りしかと嵐は

立田の里かつらしく[illegible]紙

左はなほまさり侍らん

十番

左 勝　名所中月

難波潟松わたし雲消て月の秋まさるなる影

右　千鳥

与謝の浦松枕して家なみに友よふ千鳥の声

左なふるさとりにたえしもさし有常から

まさりてこそあらめしくいかにも左の歌を

なかはの月の海よりいつる羽つはさ侍らん

まさるにや申にしえんにや侍らん

左のかちと申すへし

十一番

左 持　初寒

君やしる萩の上葉のいろかはりまつしくれとも露の初をと

右　寄風恋

人めもるかとをもおもひしに宮の庭の松風

さても人の音信に忍ひ松風の

人まつ宿の庭松風にまかせてもかへらん

かへりたくみて侍りいとしき持り

侍るへし

十二番

左 勝　述懐

世の中はまなにはかなしきこゝろしけれはいかにせよとか

右　月

世をいとふ心はなくてあるまゝに夜な／＼月をなかめつるかな

左の歌の述懐はつましき心勝とやかましくて右の月はたゝしきにあらすとやさへく

[illegible]侍らん

十三番

左 勝

宗匠

なかき夜の夢の別し思ふことみる世ゝにはかはらんものは

右

きみかためしらぬはふしわかれけれは契りし世の憂きなれ

[illegible]のわかれにもあらすといつはりなきわかれなり

くらきみち[illegible]世をはしるらん

いはましかはけしきいふるいつはりもとこそ

つゆもなくかはしなきたのむ別

のらぬ名は限りもなくみえし[illegible]

てるつきの色てや

十四番

左 勝　報恩舎利講に

今日は法のむしろにたえぬまいりて日のくれて法の光そなり

右　同

とふ人もなかりし君をあはれむや花のちりにし今日はとふらん

をもふらしそれの言まことに及ひなし

左のこけの衣をきてもいひうる言もなきかな

なくいはゆる経なり経を見れは法の光かな

たりし経をもよまてかつはしくもあはれ

まや法しかへくや

十五番

左 持　塵點劫

夜の塵は積りてたかくなる山はおもらいて法はしる

二

右　未顯真實

むかしより今日の法のむしろにやまれぬ

左は塵點の山たかくそひえてまことに

法の蘭若におのつから科もなし

右は今日の法のむしろにやまれぬはまさに

小比叡十五番

一番

一　左　持

底ひなき海にもまさる月かけの見えしは筆にはて

右

翔白浪なる峯の花よりも照るおもかけの有明の月

右乃詞和哥乃体けなりとたはかまいて

左は東方光明星とあらはれたり

まさに仏としたかふ之勝負付にさらに

二番

左　勝

述懐　入道殿　後法性寺摂政 関白兼実公

とのゐするちりひとつなきをしはらくさしてへましそのみやこさえつる

左　同

招魂と思ひぬらせ世はなにを家とていてましものと

かれまよふ家をいかならんなにをまとまる

老のとしにまさるをりしもなきはかなの

うひもちりぬるやみちにあらて勝とも

もろし

三番

左　持

老の寿のかはなき

たこの浦の波の花さくそはみれてむか有明の月

右

釋阿

まさるへからん梅か花は霜ならましを春の曙
けふの哥又なほ絵に似たるにこれはさくら
かりと申事を人のわしくやかたの絵れは
事の情あてりよりまさるんとてつよ
まけとも申しうへまとこてハまさりし
きこゆれと折ひ絵給ふと深夜の
哥は霞の色もけれとて春よみ
ともり有明の月を待ちこそいうらく
おかしくみえ侍れとまたらぬしやまさり
よく給ぬと聞この人のもけり哥

かよふ絵を同科とも侍へかりん

四番

左 勝　花の歌中に

花ゆゑにとしまれ人の別まておしへは分か春の山路

右 同

ちる花は散ぬとそ思ふ家に宿の春の宿の
れとおもふる人まそ別まてといへ雅ん
春はその限まこと不志る色へき事
なをり左の哥ハ末は句なすといと
おかしくいみと絵ふとおほえたるか

まさるへくや待らん

五番

左勝　郭公

時鳥まつや思ひの五月雨のはれぬる空に来なく一声

右　夏哥

時鳥鳴一声の跡まてもわきには霄の有明の月

きく人も前にまさるへくして勝負不
分明持とそへし

六番

左勝　秋の哥の中に

我はたゝ語りし人を我のみそこの世のゆかりの空

右　鹿の哥

むかしさへ我秋毎の秋もとくきく小男鹿の声
あはれなる人又いつれの秋さらむと思ふとさらに哀れ
とおもひたつおもひを萩のとはいへまさ
るへくや待らん

七番

左勝　月の哥の中に

きよき深月の光のさえぬれは浪のうへにも霜はおきけり

右　同

うらは浪に有明の月かけて秋やうかき須磨の関守

左清見か関右須磨の関守をよめるに浦を月
乃光をしめされたるへき方侍るにやとて左
見浪のうへまても霜ハ至りぬらしといへる方なほ
かけの程もさもありなんと見え侍り

八番

左 勝 秋田

ひきてなほ露おける袖のしらつゆに猶かゝる秋の風かな

右 秋の寄 中将

露しげき尾花か末に吹こめて風に浪越す山嵐哉

雅あるさま也けりと申しまゐらせて右尾花
かたよりに吹こめてといへる所々ことにおかしく
侍るを左歌ての事は猶みえ侍りやまぬし
さへて侍らんとそて左乃姿よくもしめ
おもひをとるかなる事かく侍るやとて左の勝
たまさるへきにや侍らん

九番

左 持 花の寄 中将

風わたる秋更けぬる夜半の篁にまつ吹たる山風の露

右

月あかくるゝ宗尊三位入道ありしへ

霜の後籬にのこる秋のきくへておもふ所に空の月に似てうつろふ
左乃哥ことに思ひかぎりなく思ひ入て侍し
右の哥よろしく侍れども猶いかゝと申侍れ
つしまみて日持とそ

十番

左 勝 寄雲恋

恋しぬる我身はかくて雲ゐなる君の宿までゆくかひもなき
見えなん

右 同

雲さへも人の宿と君かなき月をひとつみるや詠ける覧

左乃恋心こりは深にして勝劣な

くは侍らしとたのもしきてうくわんかし
いへらぬよの句がらもよろしく侍らん

十一番

左 述懐

一すぢに後の世をまつ人はなほ心のうちにわが身とやいはまし

右 勝 同

おもひやる世をすてし身もいつはりの心にかはる秋ぞかなしき
あそこにも述懐の心はともに劣なく侍れ
さらにとかく左哥よまさるへくや侍らん

十二番

左　月

茶風をいそひてもみゆるせん命ぬるはまりかな

右勝　同

都よりも秋は山里ハ有ぬへしいつとはなしに寄せてかな

もの字いはひもみいはんかたなし

いへ人ならぬ御しくハ侍るをたん

京都よりも猶秋山里ハ有ぬへしと

よみなしたるこゝろしみて侍るまさ

るへくや

十二番

左

やまひふかくいひけるに

きくのこゝろ我おもふなるにいつらかはなき

右勝

世の中はふかきにしもなかりけり

かゝる事をもおもひいてゝ命経

上くかりしくへ道なりける

世の中はふかきにしもなくてあさき

此歌又こともふかきにしかりとなれに歸

ひかりしかもおしくやすへ侍るみたまへ

さり侍らん

十三番

左 勝　月乃哥廿首之上

これと頃を光をそへてらしてるはる日乃拝
右　九月に勤する報恩講に
とこなりして
ゆくすゑの雲ハ晴れしかりけてそ世秋月
光乃やうハたなきまとひてふかゝらん
とよいうてハ綾かれし光乃月も光を
思ひきそてとひへ同筆乃批判なる
見すきをもひ侍し待りて左
まさるとまうし侍る

十五番
左 勝　金剛界五部の讃のうちに
り仏部を
いまよりハ光とあらし五月のかたなれハ一言ハ残ら
右　薩十度の讃のうちに
智恵波羅蜜を
これをきハ守き弟とやそ仏とゐのつきの民をそ見
左乃哥ハ見をしてや又仏しりたまひて
ふかつくハ絶えしまに左十文字耳なる
おもくや仏法つたへん

深山にハまきのはしけくこしもさき□をかゝの□□□□

題真字十五番

一番

左 勝

九重の玉のうてなの花をまつ三つのこと葉のなとか□れ

右 持

道みへて世をはなれける哉おもふこゝろも□□の

左 玉臺大は志やし光跡有色ならし

苔ま為那本寺□落芥や絶えんまりて

持とすへし

二番

左 持

浪の声ハ松の嵐の□□□□□□□□□□哉

右

家の風□□のいま□□に吹きて到りけり波の声と

たえ□□せ大空の□□□

いまし□□□□□吹□□□□□□□

三番

小山田の□□□□

九　霞

長霞富士山ゟおもしろかていく暁出を帰来ぬ覧

太　繪　橋上霞

ろうらや春風まそれ徒橋のなを渡りゆく春霞哉

あさ日の霞たゝ富士の嶺まてもかゝりけれ

ふかくしてらんしも絵かくを太いろ下

うちもれつき橋ともうつるやまかすみ

絵かきを春のまゝれかけつきくふかく來たれ

向ふをもろく宝にて太陽とれ

四　青

九　繪　花

吉野山をのこしおもふ花はかりみるは名所もさくらかな

太　同

おりふしもしいろなきまてまたもれは花見いさりける

太太の花もいもしめ白おもしく

とられもそらのまたよりねかくとし

絵れはさくらとたのまれしても

おもしろくさんとまめかしく

をしかきまゝうちてたまきれたり

五　青

左 勝　五月雨

山里は雲ゐにかゝるかけはしの五月雨のはれまもみえぬ頃

右　夏の哥とて　禅阿

句ひ来る花橘の袖の香に涙露そふ神の前

は太の哥七首のうちに秋ふかき

うつゝともなき山しなの峯の松

左は宮もはなやかにひゞきもいかに

まさるよしいつかたにもくもりなく

侍れは左可為勝

六番

左 勝　七夕

七夕のけふやうれしきあまの川雲の衣に秋の初風

右　同

かくはかりまちし思ひの秋の七日の星あひの空

西前七夕をまつ初秋をまちえんにかきとた

りとみえ句もおもしろくまされるとも

侍るへし

七番

左 勝　右衛門康

ゆふくれは庭のおもしろ風にけふ残暑遠く秋は涼しき

左　秋乃哥の中に

うれしさも野べまかりける花てられぬ萩またぬ心

右太乃秋の哥ぶりにもうらむかしく

ん中くハ紹介な紙殘して錦の小鳥

庭乃声にも又おかしく字由又派尺

左の勝

八番

右　月乃哥の中に

有明乃月に秋の露置ては野守の鐘は響へるける

左勝　同

今宵ぞとながむる露をかけまくも月は猶又有明の空

右哥有明の月又ぞおかしくハ

侍れど左乃月ハたゞにして有明乃空

なを紙ありがたく侍るにやとて左の勝

かちへくる

九番

右　花の山里まで

花の色のまたぬ山風の又吹きハ雲路ぬ佳る

左勝　同

深山木の紅葉してる梢ちる秋さへ滝ハ嵐ふかみ

左の哥ハ幽玄の風情なり但右乃
哥ハこゝろをそへすこしいひてなかれて候ハ
すといへるもことんにもさまあしく
せへ侍りはゝ持にてや侍らん

十番

左　　後朝戀

かへるさの月もうらめしよそまても有明の月と詠し

右　勝　　曉戀

あかつきの鐘をやまたぬ人の袖におく露も霜

右哥乃意乃あさからぬ詞の姿も能

とも乃袖に露そへてぬれもこそかし
いふへんなくきこゆるさま侍へし又
以右為勝

十一番

左　持　　述懐

世中は思ひつきてねをなけは月はわか袖にうつりけり

右　　同

いかにしてこそはと思ひしをかぬれとも

左の哥月丈乃有明にしんすく
まさりて勝劣さらにわかちかたし　持と定

十一番

左 勝 五常

くら遠山茱萸の螢の立ちしは人目の忍ひやいと深ん

右 月行

月行よ思ひけるくらくきもなくなき[illegible]おもひ

いて

始の[illegible]ところの縁やむらき[illegible]遠き[illegible]

これ左の[illegible]に[illegible]か[illegible]神[illegible]

[illegible]

十二番

左 七条

[illegible]雲枝隠り

[illegible]さみくして[illegible]

うなゆ[illegible]やしまらくら縁の雨[illegible]

右 勝 月周

月周さ[illegible]よしましまして

[illegible]思ひ[illegible]て[illegible]袖[illegible]

これ[illegible]の[illegible]乃雨[illegible]

[illegible]

右[illegible]のかりしいへ[illegible]

[illegible]つくや[illegible]ん

十四番

左持

秋のころ故円太良にさいは墓

前まて念仏行きけり

右

勅作法師ふかれて好西山

往生院まて妙法経をよみ

山里は袖の紅葉の色もうき黄成ぞふる秋の紅葉に

まそ雨ふる入さりけり

尋入我被には露落て黄の記にあまき風にて

西前左は黄をこふる秋の浅太は黄に

深乃秋風吹に竟深つらん御勝分

おなしく

十五番

左持

金剛界五部の中に蓮花

頭を

右

妙法蓮花と

末天は蓮の内にて色乃但部字の道の勝ゆへ

就忠の心はと坊の法をいひては花にてたゞ深く

そのきうの字大乃妙法蓮花勝負

よそよそへうしもや御んよりて申

科とす

いつみ西に心なく風にはしきたなて蓮の花の手に

久雖願而出之道誌
下留東湖之初段云

八王子十五番

一番

左 持

山川の底まや淺きしるはしこのゆふとさえいふさしも

右 橘政

折ちつ梢もん花も咲ぬかし詠めかくさし春の西風

さと乃奇千年の松も顔乃ひんゆこしふり

さめのもしくく待つ事や左の哥は詠乃め

くみ乃をり乃ちつ風とろれ志乃乃恩く

まゐらぬ庭らに於ては待つ人の詠事乃

流れひきあそ勝方あるへからて左持

二番

左 勝

とうすまて日高の山をとりてぬる涙あや見きの花

右

ねかしれ去もしやさらし庭もひてかもや去らし流れ

并面首しもまことに涙あやしき詠小気

左御歌は大方哥合まて判はことにかゝす
はしめより難波津ほとゝきすやすくして中宿は
ゆきまて御れしもしもしきことも猶侍り
ハ不論中くし右乃哥乃たくみおもしろ
心願ひ通ふおこなふ所乃哉し甚しこと多
其子乃十五番乃おくまかせ出待侍に左乃
なまみしわやまさしく御乃まれ句まはれ
しやすきいふしく見えん御りて勝にてくる

三番

左　ね

春の法大事流ら人かな

へたゝりし之余時
みよしのやまよしのゝ霞のうちにたなひきて山乃春風ふきをと

右　春乃哥中よ

えりてくる花は春風なきてそ山桜にそ咲かは人
左のおもしろ山たるちりかのゆく人許き
古歌おもしろけれとも哥乃ものちかし詞も
之清芬御れ同科とし

四番

左　勝　春の哥の中よ

空も海も日とつまちら浪ちらかわまけるへ永海かゝみ

大　　帰雁

逢坂や霞の袖にしつれ春まてまされてかへるかり金
春まされてしいつるかりまことしく
霞の袖をはなるゝかりかねと見てゆる
さくらの花にやすむ見えなから眺めれ
心面影をおもしくや帰るらん

五番

九條　　夏祭(?)よみきる中にま
夏の月またとへん時鳥かそてにぬれつゝ五月雨のそら
大　　夏夜(?)

夏頃のおもひいまし時鳥きみねきにわするれか
九の夏月またとへんしいなかんらし
よまつしく待わやそうとかし

六番

九條　　月の夏よまとよみよらゆま
三月のあかぬしつたにちやそ秋のうゑ風
大　　海邊夕月
なかいつゝみちのきえて光をもあふかりの夕顔や
秋のつきにめさそしやそて秋のゝし
ちるなもんまさに花ことよおもしく

すこしまさるとや申へからむ

七番

左 勝　　雁

いつとなく鳴見の里の有明にたのむの雁の月になくなり

右　　秋の哥なりと釋阿

以上右は野邉の秋風よそにてはきゝ深草の里

遊ん乃哥宗法院の御時の百首の内に

侍り是みえたる事なれは侍りぬ

内論は深草の里乃女はなりとも

一とし人はしとも見えてもて侍り

さ候らへは院にもよしきこしめし

左もうまく候しとて侍るを左の哥

体見乃さまのあらはなる月にはかなし

その外乃雁はうしろおもしろき侍れ

左の勝侍るへし

八番

左 勝　　秋乃夢

なか月もいく有明になりぬらん浅茅か末のつゆのさむしろ

右　　秋霜をも

みな紫のゆかりの萩も枯るしまきはあかはてむ頃

余所にやとらん霜をまてまおもしろく
侍るを右の哥は有明をといへは
むなしく見えんとおほしく侍るは又右の勝にて侍る
るへくや

九番

左 勝 冬の哥の中に

月さゆる霜さこほる木のまの鏡をもかゝす流る

右 同

さえつゝやかはつか蘆の葉にはまたぬ夢路のかよひ路

いかにも藤のうたさへ枕にしみしくへく

折しもつむ山の末のゆふとを流く
さゆる風の寒さのさまもたら
まさり侍らん

十番

左 勝 寄関寒

冬の夜はあらしを思ひわひ須磨の関屋の立明の月

右 讀人

東路の末の旅寝をしのふらん須磨の関の月ならは
須磨の関屋の有明の月の哥のもとに
のさる哥もまさり侍るへし

十一番

左 勝 海路

をちかたは霧も月もさえてたえぬ秋の浪のうへのみち

右 同

漕出る舟は奥もしらすなりにし浦の松風ぞよはる〳〵

右の海路の心詞殊勝におほえ侍るを左の霞秋の月なかめさひしく侍れはまさる歌はなほ〳〵勝とそ侍るへきやうにや侍らん

十二番

左 山家

人はみなこゝろの松をまつともしぬ月にみえてもあかぬ山のおくかな

右 勝 同

花はたゝ里ならてまたたつねしかは人もてはやす山家風
花の跡の松風もしのひ月の山のおくのすみところ
（左のりくは歌たの花のへはまて
左の歌は心のくらへなき人はこゝろ山のおくへ
しつみまかせてあつしかまはへや）

十三番

左 持 山里

山ふかみさひしき宿のわかれしもいかにかわするゝ方の心も哉

右

宣ふることハ来こと葉ハけふ給ふことこゝやましけれ
二首乃心ともにあしからねハ心もある
くなり乃としるゝ人乃よしくさもきこえし
おもひ捨て哥よ右勝可為持

十四番

左勝　　百尺竿頭須進歩

人ハみな家をもすてゝ中空なる林乃外乃道すき暁

右　　無常

まよひまよふいつかきゝつき家路ハみなおもひすて夢路の暁

たゞ哥乃さまかはりて詞おかしく聞えしたのむ
わかれをもたてゝやすらぬしとの心ありて
まけるよくやはん

十五番

左持　　心会不空過

おもへとも道あまたありて谷深き世乃中乃法の雲

右　　内秘菩薩行

いにしへの麻の道のかすも心の月ハくもりなきりけり
きゝん会不空過左内秘菩薩行外現声聞
ん月詞もせいおかしく聞ゆる勝なるへし人

しらぬ夜おしみしる科

若枝のうつりにほふよかけの花はさけとも

客人十五番

一番

左

まさくまありし世を思ひかさし給ひ花の常紀ちゃ

右　勝　　　摂政

宮文をひらけてやとひかるゝしるきみね花の古里

たちよりまさし詞の花又よ続て和歌を

乃常に紀もゆかしく紀か花たれさしの白

松や花の古郷にまてしまちつへくや侍らん

二番

左

枝かはぬらく川もすて波照らく房ましまします光の花

右　勝

常花風といそて嵐山に[illegible]ほし葛の色の春もと

左乃音も尚猶枝[illegible]深山の風花吹にて

待らんゆるしもつくや

三番

二　左
　花の哥あまたよみ侍る中に
咲そむる花のたよりを思ふとも雲にまかふみよしのゝ山
右　勝　　同
吉野山雲のはたてに散花は風もをしまぬたきの白糸
見渡せは吉野の山の雲になかめゆく咲んもをし
くゆかぬ太宮の山根にちる花風ある
おつらん流れもて糸のくまもなく
やゆらん
又青
九　持　　同
松風に秋は花也よいとふともなさけもいはらしかな
右
花盛に時分も露もひらくしきは春風
花の哥にきゝよりつくるもうしろ花
ゆたゝに秋なる山家秋は桂の月
なにとし松風声の色をとそくる浦し
にみをとひつる絶もしぬしさへて春
乃なかはとりの色のしれまさるへくや
ゆらん
又青

左 持

芳ノ哥乃中より

雲まよふ夕は秋風にあらし風もたえていぬ萩乃下枝

右

くまなき吉野に夜毎の花の秋を待ちて草葉の露

左夕は秋をこのましといふはおかしく

右は吉野の夜は秋のなれはなま

詞つゞきいづれもまさりおとりなく持

六番

待月

歌山

左

いざしか山路もたゆたき浪のうへまして八月の影(?)

右 勝

月哥の中より

夏のよもあけぬ(?)くはかなく雲の衣をつゝむ月のけ

右まさりても月のなかばのすゞしさ

まさるかたの右の衣へとんおもしろく

や侍らん

七番

左 勝

秋乃哥乃中より

東ばしはやくも(?)や嶺立しけて紅葉ぬらし山の梢

右

同

落葉の霧をわけぬ後の夕やけ秋風吹き

須磨の関屋はすへて都のよはけてさとの
すまぬとましで秋の夕暮たりし
やうなくとも小山田のひたかすら
立かふらん朝霧のかくれかくや
御らんなる判は勝と申へくや

八番

左　勝
山ふかくとふ山路の月なれて
山人跡たえし岩かけてまされける月を見る覧

右　二条院のはまへしそのこ
とこし法輪寺にて月の心をよみ

いかなれはさつの上なる月とても雲井の月の紛るらん
は言とはるほと見えまて雲井の月紛見えし
手枕の袖にもとけなから主様か仇の言ま
きれにしけるける月をと見らんと御なるへし
しくわしく紛らはれてなる勝

九番

左
雲井の中の
夜の月更紛つけて出つる空にこれは月かとやまかはれん

右　勝　同
人さみれは雲もしつ月は浦なれや浪によれ浪よりまて

たちかへりあまりをよそにみてはおもしろく
みし給ふ大乃つもりはぬれ松の宮
しらさ海にしなすかおもひけおもわく給て
まさかにしせへくや

十番

左 勝 恋乃哥なかり

おもひ出つるかなあてて恋すやもかう敵なみくふ

右 契恋

たくよのあたえいふのいつりとかきまてしとい渋らら

まちたの恋ひとりよくふかくゆうかく給ふ紙

たか絵乃恋すと宿ふらんも恵みの句よろし

くらも給らしやままうへくや給らん

十二番

左 持 旅哥

あつまもや須乃宮月の来とかなへてこそハ思ひ立しか

右 同

契ぬる心ぞいく月のかれたを思ひいてよ宇津乃山守

おもかの旅のふいつね紙あさうとや

らしれ清見か関乃月の来ましとよ

さしてよへて思ひさん 持へしと見給ふ

大宮津の山守は月乃ゆくゑまて思ふ
おもしろ浦よりいまも[?]のしるしらぬ
てあかし神と[?]

十二番

左　　月

旅の世よ又旅ねして草の枕夢みるにもみゆらん

右　勝　　百首乃哥の中より

いきの身乃うき世わするにたよりにもよひてもうきは海のかなし
　[?]

左　夢のうちにもまた夢をみるらんあけ

くれのかなしきゆきの世乃浪にかへりて

しきのこゝろに見えしゆきて大和にも

の句ありし乃浦の朝霧ありしあれ

ておもひ乃句の人の約こりてまなは

とまりくや

十二番

左　　述懐

意はしむ人をむ[?]に者乃身なりて心乃やとなりめり

右　勝　　月

たちそめし世のうき身のしるしられぬよりいまは[?]

左右乃は述懐にはもく人にはしく[?]みへ

ゆふをとたのめ世のよしのゆるしいつれならん
うたまへんすらし所あゆるしやまさるとや
かし
十四番
左勝　　月前懐
けふかすゆ三笠の山とおもひける月をとる雨とめかね
右　同
はれつゝらとはしておもふうき世をいつへかりける
左三笠の山をとふらひて月をとる雨の雫
右はるのつまん花入てうき世はいつく

二つしるしつへ心んちくもかりけるなく
見月神となし
十五番
左勝　　或住不退地
説は心のまゝ法の道なるとて人となりぬるもの
右　　金剛界三部の中の金剛部を
そのしからさる世の中の尾あなる引るてはなれ法の身に
あまつまたの終まなる
十禅師　十六番
来は鶴のそのまゝの内をめからをうけて知るらん

一番

左　勝

ほのかなるまよひもしらす朝日まつ山のはのみそ見え

右

あはれにも無明の光さしそふる道に有明の月

左朝日まつまの風よ切利天光り(?)の露

たのもしく御祈なる大にくはしき

道にきよめの月深くしてもおく

御保勝なすへし

二番

左　持

家を出て山の奥にも住みなから心はなほそ

右

山ふかく住みしても嶺の月

出家しておもひなしなる山の奥

右もおもはれて初心の御

判者御のよし

いかにも青ならす共にかくしきもの白き

世をいとふ心あまりて思ひ義非なくして

集に入給ひし御(?)こえ侍る

主実経(?)等なき也へしもって其御

しるしとそ

三番

左勝　花

梢には花のちるをそおしみつゝはるの

右　同

花の色やまつ心ましき枝に山路をたとへてこそは

あそふ乃花乃色尤のこゝろをくなへても

ありさまこそ右は郭公まへにかはりに

をもしろき鳥のさく花なるらん

車よりよそにしくらんやは右為勝

四番

左

山風に匂ひし花の雲消て春の日ならは有明の月

右勝　三月盡

かすみてもかすみの袖もわかれゆく春のわかれの空

暮る春の空に霞の色もなくこそ見えけれ

右の歌ハ太かた為勝

五番

左　夏納涼

山かけや思へる清水むすひて夜はなかなかなる日くらしの声

右勝　同

夜あらしの峯の松かせ吹払て月をすまし有明の山

左夜のあかつきなる日くもりしかは思ひみしく

おもしろくいはれたるを右乃有明の山殊に

有明のまさる方に侍るへし

六番

左　持　　立秋

われをまたぬまもそよの夕露におきちら吹秋の初風

右　　秋に寄る乃中道

人もねぬ荻の上風吹ぬまも山はすゝし秋の夕くれ

両方の秋風たちぬらんとて太山かけをと

ともかうも定かたし勝劣をとかく持とす

七番

左　　月に寄る乃中道

秋風のはらふみれはもかゝるとくやすむも荻のうは風

右勝　同

はるかなる空はさてなる月に光もさて峯の松原

きこえてもすむはおもきのうは風みえく

おもしろく侍るとみえとよく見ん山家の松風にて

よろしくにしも意しなる続しため侍れは

左なほ可為勝歟

八番

左 持

鹿

山里はあつまかたに鹿の音ハ来ぬ夜の哀の限也けり

右

鹿の音をきゝてそ風にしる山はあはれなる秋の夕ハ

あるしの鹿の声も右の来ぬは哀の限り

右乃山光おほくの哀甚し右為勝

九番

左

花は風に人をはらひてうつろふ

花をへてうつろひ置く野辺は月にさらす露やおもなきと

右 勝

某入道前摂政家歌合

時の名所書る所

釋阿

月さゆるみたらし河に影みえて氷にすれる山あゐの袖

左右の歌ともによろしくいひつゝけられておかしく

こそ侍れ右又御屏風の哥の詞にて

侍りけるはいつの歌の事まうすと語をきゝて侍れ

とおもへるなりすこし両判いはれ

侍けるは御屏風乃哥なれはとて

浦つたひてしほりしよこそ流こしなれ哥
の中にハ是編照をおもしろ御しく
なぞらへ乃哥よみとも佛の心ハ
いはきこまよりしかりとこそ相傳侍る

十番

左勝　憲

武蔵野ハなをすゝしく詠つゝ夕の空に鴈の鳴なり

右　同

家ゐハ庭乃萩原かれて人をともなき桔梗の露
西乃のしひたの玉章乃錦なりけり

いかんいふらくおもしろく侍るとおも乃爲人
をともなきに秋乃花薄又さん流り紛之

十一番

左勝　百首乃中に

花都乃たかき名高き浪まてもおもしろく松かふ松風

右　同

秋のよ富士の名に見るや秋かに雲の空
消ゆる

左都路乃おもしにかよふ松風にとも

十二番

さいて中の日旅錦しん

九　述懐

おもひきや我老の世はすてられしそれも世にあまる

右 勝　同

世中はなにつらむやうきふしみの苦にあへ住くらしはねても覚てき

左歌の述懐はともあくはみえ侍れと

右の歌うく住はねても覚てもといへる

猶よろしく聞え侍るにや

十二番

左 勝

寂蓮上人廣川ならひ

侍入けるまの菅君家

侍しは月日にあそひて

侍りやうなりし

浮世にて月日は影のみちきそ吹わかぬ道ひし照まゐれ

右　同行上人興まて侍るを元をへて

大原にこもりをりけるに

世の中に寂の窓は廣きに入事にもよりは月日もすぐしけん

九月日のつけるかかりきてと侍る頃の

寂しさはすこしたちわたる中にみぬ侍る

十四番

左

母常

身はいつまてあるましからぬ身とおもひすてはなけくらん

右勝　　同

もろきはいてたまはぬこの世のことゝおもひなすゝ

たゝたゝりふかきこゝろのかくしゆかさとたゝ

おもひくりていかならむとおもひをたのむ

世のおもひをいはんかたもなしたまへ

はるかにとしをかさねてのちこそや

十五番

左　持　　菩薩千万億恒河沙

いまは我山のしみゝきえ月とともにわかまつおもひ

右　　法師品

人すむ草の庵の法のみちにわれはなれはやとおもほえん

右方の哥は清芬作者のやうにてあるらしと

申しけるは哥の道さらに申しかたき事なる

事のむかしよりかくれなく作者のは見る詠

哥をとおもひまはりて申しなさるゝてや

のちへく作者なれ大方哥は今やとらしと

おもしき詞といひ作者のこゝろとどかきさら

くれもせされはもとりしてかの詠哥をといて

よくよみおはりつるにも千詠したる

まことすくなくみえんまても幽玄なりとも
きこゆるこそのあはれ風情よきに哥よ
なりける道にいたる詞をえらむのみにて景気をえ
れハひとつのやうなる事あるまゝなるへしいはゞ
の花をめで霞のたなびき秋
の月のさえわたり虫の声をきゝては
の梅のにほひ春風の吹かひ草木の緑なるよ
さくらのおもそふさきうすくもる風情なる
事のうるはしきていふ心なるつくり
にやはしは侘しとの月やあるへし

春やむかしといひ我身の雫にふる
なといへる心をもてなしてそのくさこと
ゆうなるかやうなる心をもる詞よみにせん
こゝろ入る哥は紀貫之の有難き事
なりと近きまゝにしもこゝろの誠をみて
侍るなれ百首をもしてつけて哥会
これも誠に難有事にはみえ候へて
稽古にいらくいらんにおりひたすら
ねをもえんてうへしともおもひけれ
ようさるへし且かた末世の契なるへ

もろ〳〵詩哥乃道ハ大聖文殊乃智
恵よりおこれる事なれハ文殊乃
霊験を以和歌にハ論なく和歌を
なし〳〵ておほろけならぬ御評会侍
はいつもよりハいかならりてありそひ
中納言文行らんまゐらん高東善光寺
よしみをやりかけてあまりにくみそ
おいまうしんとまて見えて侍
うけかひ紀哥よみなりしを好むまかて汝乃風合堂

三宮十五番
一番
左　勝
三月まつ散くる花これハ我なりしものを
右　　摂政
みな乃つきよしいふなひとりかまえる白浪に
左大臣花守護乃かゝりよ勝なりと
きこえしたなれ三れ山よりちりしく
以人もはいしまさ海へてゝ花見ん
二番

左 勝

家にのみむかしの松の中すみなれてこゝろもしらすなりける

右

春霞とこふ秋山河乃かすみにあれは浪はあつしと思ひけれ

九七乃秋のゆふまくれけてもこゝの

ゆふすていつるんことはしくや鳴らん

二番

左

春乃京乃中まて

むかしみし春のまきそのおの塩にこひて草わかれより

右 勝

同

霞たつ橘の沖に漕出てもろこしまても春はみゆらん

左ちる花の光みえて山草乃ちりのはかしく

いはねにそ大まつ乃沖よりもこし

まてれ春をかへらんとや及ひて

待ちよし

三番

左 勝

花乃雪けれ中まて

花は桜吉野の山いく所かはれ山花は咲きつゝ立ちかへらん

右

同

雲は花とみえしはものとやたつみゆ夜にもちる花の雪

西前乃流ゝもおなしく岩かた
さまならむものハ三輪乃山とこそ
くらまのさかしはけはしくや侍らん

五番

左　勝　鴨河

うちわたる武士の八十氏河の名にそ有ける

右　家之納涼

宿からや[illegible]さしもかゝる枝に清き庭の流

太納涼ともいへる涼しからん心も見えて侍れ

庭からも河乃中にやこゝの[illegible]侍らん

まさみえて侍るをもや侍らん

六番

左　草花

霜露もしをれは秋の露に萩しをれきまきれ

右　勝　苅萱

こはおほれし野の[illegible]離の小萱のもとに露なかき

左草花萩にもまされとさきものゝ

所なしく侍るを野に露よもるとも

たえそうやうのきこまつらしますれし

侍るとていへ、なとるもふくみて侍る[illegible]

中宮くらゐ

七番

左 持　　秋乃寄月中上

秋の夜の長きにあかぬ人もなしおもはぬ月をなかめ

右　　月乃寄中上

思いつゝ心は空に月みえてあくる夜もなし山の端のかくれ
たゝしはや大山の端のかくれさしおもふらん

深からんとみえ侍る

八番

左　　月の寄月中上

山の端にかくれ入ぬる月かけに松の嵐ぞ残るなりける

右 勝　　月の入方を待入道殿上

紅葉葉を世はならし月影に霜にこそなれ庭の面哉

右も大方月入ぬる月の影の嵐の声かゝりて

いとしくも聞えてよろしくや

又月影霜にこそなれるんやこゝろなるらん

下勝か

九番

左 勝　　時雨を

もみちはなりしぬ木の葉に袖ぬれて時雨の晴かな

右　　落葉

時雨にも霜にも秋にあへて風にもあらハこのもしからう
うつろふあらぬにへ侍らんいふへくおほし
く侍り但左の哥もあまりなるめを
侍りあらはさのみまさ紙のまうるし
く覚え侍りて左を勝とや申へからん

十番

左　勝　　尋恋

心をもゆく恋をも尋ね侍る松の梢にまたもみえ侍る

右

恋の哥に中よ

富士の根も煙はぬるとのつらなたえくまきこそ侍るなれ
右の歌も又ことに勝方なく八侍る
を松の梢の又きものとかなしとなる
あらくや

十一番

左　持　　百首の中に

そこはかとなき白菊の花ハおきてつとめて風こそ
右　　菊を
うき世をはよりてもしなふ世の風にハ色を菊の花
西前の菊のらも共にそ侍る方同科し

すへし

十二番

左　　述懐

なからへて世をうらみてもいたつらにすくるつらさそ身にはしみける

右勝　　同

思ひきやすてゝもしらぬ身なからもさてもまたねかふかたもありとは

左右乃述懐みなおもしろくみえ侍れとも

なほ右乃歌は心ことにまさる方侍り

十三番

左　　猿乃声

草まくら秋乃夜ふかくいてゝ見れは有明乃月

右勝　　同

ふるさとはかきねの山乃峯こしにほの見えて

いてし雲間乃有明乃月をもとゝむる人も

左乃歌もいてゝは右乃歌乃かたにまさりけり

ちとりのなき人はとゝめかたし

ふかきし

十四番

左勝　　百首乃歌乃中

春も秋もとまらぬ世乃なかに花も雨にちる

左

猿乃哥の中よ

釋阿

夏の夜は有あけて云ふ夜半乃月似乃方に見
けふひ乃哥よ夜半乃おもしろみあまり
きこゆ哥は猶いともみし侍らねと是も
猶夜半乃月ハよろしきさまやと聞え
侍り待ちしとある乃風空に雨ぬ夕
暮と侍らかあり猶も夜月よ侍るよ
きこえまかしく侍らはおかしくや
侍る例乃ことわりてきこえ侍らむ

なく傳の

右書

九 秋　家是宮車

左　不来自得

いまをさかりに車よ佐乃道ハ門からかよ有けれと
我乃中よ云ふむ人と思ふさもしりてそ又れきえさらん
左乃ちかひ大抵中又也勝方に補よ
夢をまよふ乃れやこそ哀けてかへりさまへ人の月

此哥合者判者後成入道自筆也判

書之正本也此後撰之 後二条院御 人々書之
為七巻今又為貼持来所重一帖
者建久初比後京極摂政為少納言
之時所詠哥中撰定二百首 但百五十首之
為哥合七社各十五番并一番大方
令詠加判者之則令清書之給又判
者後成家之詠哥中可撰加七首之
由相諸同撰進之仍毎社加書之則
大宮四番太上天皇三番太皇真子五番
太八王子七番宮人八番大十禅
師

九番太三宮十四番大哥第之紙書而改
世哥一人所本哥法號之余依無信
法樂神國風俗之為残顧法治家
頼長殊取求有此清如舊進之今加
七社實展歌歳觀之描哉 後撰集哥合
編又令之一首給二三年后二番大哥是之
又判者毎番之奥書并一首詠哥為之
甚後清書家摂録宣進以見所任
天台座主判者入道保元十年奉仕受
撰人又甚得 上皇令之好和哥道

給之同仁和寺御室守覚法親王亦
被詠進百首之中若有和歌古風
余命及七旬之後詠百首法楽訖剰
上皇令撰新古今給之時千百
詠哥被撰入八十余首之現存之
人無比例歟二三新古今之作所
詠之百首七ヶ度出于世手宅勝其
首詠歌仍為申請殊重清書大納様
屋哉三十余年之後筆跡少々三年
首用両之此記無之二ヶ所 天下
不審 紀

證見人令嘲哢耶云々

此一冊之祖定家卿以自筆為正本
為子息政為書之

前大納言持為

此一冊下冷泉持為卿以真跡一字
不違書写数返校合之訖

續哥合部類巻之十一

仙洞十人謌合　正治二年九月十二日

題

神祇　若草　落花　菖蒲

時鳥　浦月　山嵐　曉雪

水鳥　庭松

作者

女房　勝三持二負五　　左大臣　持三負七

内大臣　持二負八　　権大納言忠良　勝六持四

續庫

隆信朝臣　勝五持三負二
家隆朝臣　勝六負四
前座主　勝五持四負一

定家朝臣　勝五持二負三
雅経　勝四持三負三
寂蓮　勝一持六負三

講師
讀師
判者　定家

一番
神祇
左勝　左近少将藤原定家
君をとまもしはあまてらす神の恵もわきてれ
ひかりさしそふ秋の夜の月
右　上総介藤原家隆
見ぬ世まてこころそとをる神風や
みもすそ川をあふきてそ思
左頗有思所にや
右末乃哉字似無其要可為左勝歟

二番

左　勝　　　侍従藤原雅経

いはもまさしらふ千代もあさ日まて
わはてぞ神のひかりなるへし

右　　　沙弥寂蓮

わかふりいともかしこし神かきや
みもすそ河のきよきなかれは

左んわきき侍之　右日ろうきあまと
きなくや

三番

左　持　　　左大臣

神かきやみもすそ河に思ひやる
ありしをもまつ藤なみにすむ

右　　　内大臣

かきくもることはかりしいりしもの
まつかたことをひとりまつらさ

左右勝劣難定之

四番

左　勝　　　前座主

春といへはまつ日の長閑なる人をまつ

よし波さ宮まんあけまん玉うとこ

右　　散位藤原隆信

かゝりそこり和歌の浦波に添えてぞ
見しや絶えし玉津島姫

右の歌昔さしなる雅なる姿と
左は今少しくもねんごろ
にこそ侍る

五番

左　持

白雲もしもしけき神風や
御裳濯河の流なかき末まで

右　　権大納言忠良

雲の上の木の葉のもとつ氷とけて
なくとも又ましくなきなり

左は天のいはとの昔を思ひ出でて
えてみむ河の流ともその
世の御代にたへたる事はよ
わりてわかち侍り

六番

若草

左　　　　　　内大臣

行末の秋の哀をとへ霧かかね
うらみさりむすひてはまし哉

右　勝　　　　権大納言

しもいはす草葉の末をこそ露もなをなきに
あさかほ秋まつ草をこそもしるかな
いつとても秋とわけてよそのみより
て左をこころめてあさまとらん
華いく侍らん

七番

左　勝　　　　左大臣

秋風吹わしくあけりけんあしの々
雪さしけん草そ名かかりつ行

右　　　　前座主

霜まよふ野へまれしてみまくらさくと
いろよりそ山の秋の秋の草
左は心にかけりしはこころあく
右は風にしれ根もや侍らん

八番

左　　　　家隆朝臣

まちてまつ人めかれゆく山さとの
をしきもあとなき庭のつもる雪

右　勝　　　　雅経

きのふこそかよひし人の雪は清風して
またれつるあとをぬへき一しかれ

左歌み山かれ松はら雪さなと
いはれし忠まくらまてん興
こゝろは深くみえ侍るを所
為勝也

九番

左　勝　　　　隆信朝臣

旅まくら夕さりくれは松風にきゝなれて
かきねのさくも萩原やけ原

右　　　　寂蓮

さは風にひとりの床もかはらねと
くりかへしおもひみえぬはわれ
左まさ前は萩草むらすゝき深に
侍りたれともさらなるゝえ
え侍らたまさまさりてや
侍らん

十番
左　　女房
見きてもはかりし雪は清瀧して
山しくれをしまてくもらぬ草
右　　定家朝臣
しらまひく見れとしもえもりて
かすみよそふ野のあけのまよ
たてもわかぬ深き花の山かく
れをしとつのえはなしく
侍り

十一番
落花
左　　家隆朝臣
あをとし朽ちる手ふるあり尺桜の節
ふりまにそゝむかしの雪とし
右　勝　　女房
みよし野は見れはかしやかすみえん
道もさりあへて花ちるちるまの雪
左大臣もに古今とれりてよみ
侍中よたちまさらひよまことは

と侍之

十二番

左　勝　寂蓮

ひとゝせをゝりてそ今いろつめくこ
か勢よ華さくミよしの山

右　前座主

花にまりゆきちらにさくらかな
華ふき侍風やさ尾のさくら
左方風よ華さくゆゝ山侍さ
くよ知れゆく　や遂風潜用
よもの日十日華開ゆきとに侍
華をか勢よ則ちく侍とのまさ
てきゝ方ゆとろさくゝ木春か勢
よ則ち気を侍ゆとも此ゑ〱ま
ゐつくや大方遠忠をゝ侍
人よりし侍もと指縣をなりか
一〱持なるうや

十三番

左　持　定家朝臣

よろこひつかくよもてゑすさくて

ちりのまかひの春まて山の櫻

右　　　　権大納言

みよしのゝ花まちころの雪ふかきに

木すゑまた雲とたえぬ山風

たえまもなくちりにけり

十四番

左　　　　左大臣

あさら夜のあけめし花に風吹て

月とのこしてちるしら雲

右　勝　　　雅經

花さそふみねにと雲にふきとめて

みつしをかへ春まて夜の櫻

たえての月さかり露たえしや

右は紀ぬめりしくゆめのみ行り

十五番

左　勝　　　隆信朝臣

ちるさしやとおもしろし花またさかう

くもゐになかくさし庭まて松もなし

右　　　　内大臣

ちりはりの花と梢にふきよせよ

はるこそ風かひくさん
たちはなのにほひのこる
右枯に吹をもかをしのはるゝ
くや

十六番

菖蒲

左　勝　　　　定家朝臣

よなよなとはけふこそむすへのあやめ草
ふかきよふかきにねやしきつらん

右　　　　女房

夕かけの葦葉橋にかけてまちて
都にはあやめ葺くらむさとめに
立わたる橋にかけのたれむすひ
白たへしくや

十七番

左　勝　　　　家隆朝臣

手にとりめかれぬ都にあやめ草ぬかぬまに
五月雨の里のうきをなかむる

右　　　　左大臣

きのふまて袖も枕もあやめくさ

けてそひしらふなるこそ契りぞと
左哥よろしくきこえ侍るを右の
さるは事なるべし

十八番

左 勝　権大納言

あふことをひとしれずやとにかさねきて
あはやや見ゆる面ひかりらん

右　内大臣

よるやつんやとの見しにあやなき
いはひとひとしふさきつんとや

ちかき世には日さしくさすこそ秀侍
みやかはこそ草庵の名にて侍るよ
忘親きこそことこそことはえくし
ことよしにやみゆるもちえてたへなり
事なげにたゝ右勝とや申まかり
侍らん

十九番

左 持　寂蓮

ふるさとの花橘やしるらしく昔偲ぶる
むかしおもふにおもへあはれめえまきり

右　　　　　　　　　　　　　　　雅経

きのふまてよそのあやめ草
さともなきまこぬる枕なりけり

左右共難無指事又無差歟

廿番

左　　　　　　　　　　　　　　　前座主

月かけをさ月のまつの木のまにて
あやめそ軒のつまりありけり

右　　　　　　　　　　　　　　　隆信朝臣

ほとしくも秋にかわふ中河のあ香
軒のあやめとかきねやみゆらん

左歌あやめ成日かけていとむしの
河まりにや侍らん右こそさる傍
とゝなきこみやなをゝて可為持

廿一番

郭公

左　　　　　　　　　　　　　　　前座主

さりともとおもひてまやほとゝきすほのとも
まつまつとのみてきこの夏

右　勝　　　　　　　　　　　　　定家朝臣

海ちかき月さへ夜の中山なりくるよ
一首の体はことによろしく聞え侍り
左歌ちりくるなとかいふことは侍れは
風情かはるとも言葉いさゝかつたなく侍り
時鳥の声は郭公のなくこゑを歌合
にはあまたなから御法侍るにや
左すこし詞いひたてまさりて勝と申
次二番
左
寂蓮
まさきのかつら山路をたえてゆく雲の

一首この深き山路に見えつゝ雲
右 勝
女房
あさからぬ心をたていつくにか因れとなりけん
一首たかきかたにも雲にのこして
一声このかたの月にあはれけなきて枕に
なきさゆくいはらいてきつゝかな
あはれすてなき心の侍る
次三番
左
左大臣
ところの影をみのはけしきを

華からし花に香そくなり

右　勝　　権大納言

おもしろはまた雲のまれ都に

あさりの春をさのゝめの月

左哥つよの事より大哥なく

一首ましよ哥のよろしきて持

くまそ勝る

廿四番

左　勝　　家隆朝臣

よるのこしきの猿猿は霞そて

やまのかけちなか次の一首ひさしく

右　　内大臣

よしてもやいさ鶴小舟しらず汝

さらに孫に有河にも人よいまみえん

左の歌らは山家の歌大事なりいつれ

いへる哥の侍るにこそて難無

此歌よ以下詞

速て見侍る是之

廿五番

左　勝　　隆信朝臣

きのふも松山らとゝみのしるしなれ

いはほつもれ一首思れはし

右　　雅経

まつ○こし　かた○つきのかけ郭公
第一ふらうかれ声もらすらん
たれさそふ帰雁なきてや大かき藤まつり
よはしくもの手や行らん

廿六番
浦月
左　　女房
秋きぬ月かすみと遠くなりけるそ
ふけゆくやまの海の浦風

右勝　　前座主
ことそふ波にかゝりかれて手桐
月にうきしまし秋のうら風
波にたれのしかの夕暮人羽林
直侍り左歌は浦風よりは立まさる
へしや

廿七番
左勝　　権大納言
よる浦や波にうつれる氷さえて
月のこほりとつゝくまけりせ

右　　定家朝臣

あかしかた海月まてりて冬そさえ
うけてうきせの波にかけん浦波

左月の氷とみえて松風に吹しく侍り
右は浪もてゆへ侍ていふ歌と覚えて
よめる歌あまりあはれなるは優にも
侍るへ持

卅八番

左　持　　寂蓮

さよふけてこゆるふくる関もへて
つく秋かせの月とみかの浦波

右　　左大臣

月影や波と結んねらすこほり
さえわたれ浦によるの舟へ

左右ともにいつれの勝劣なくや

卅九番

左　勝　　家隆朝臣

ふるさとに山のはまてとおもふらん
あかしの浦にあり明の月

右　　雅経

哀なるあしたの浦のあさの波ここ
すめとも思はるゝおもはぬよし上下
左方人詞をひきよせまつる波なり
歌よろしくして侍を左勝も指事

三十番

左　　内大臣

たこの浦やひかたにかゝる月ほとも
わかうらめみしは秋のあはれ哉

右　勝　　隆信朝臣

わかしもあかしの名とはなりにけし

月よりも猶まされ波のうしろへ
へ海人とあはせしとしてんや歟
うらかなしくもこよひて侍る右勝
定家

卅一番
山風

左　持　　女房

うすゝきやまよふ袖もしまし宝山
あらしふくつらふ秋のまくら哉

右　　左大臣

しらさくもこともの事のいて又有て
こゝ山まにあらし秋と侍くへ
左の猶しく侍り右もこと也侍るら
歌くは持なとにや

廿二番

左　勝　　　　　　　　雅経

吹まよふくものあらしの秋さむて忍
こく侍ともなくさ山かくれにか

右　　　　　　　　　定家朝臣

秋のあらし一葉もおしめ三笠山

ゆふ付さくしの深つくもとまてし
へ左前こと不おしくてまて此哥侍ら
左の哥ゆふ十り何よあまりんこりき
て易見難及

廿三番

左　勝　　　　　　　　前座主

秋はまく萩み紅葉とまおなくて
あらしよこよの志賀の山人

右　　　　　　　　　内大臣

ちくらもゝ何と紅葉をおしはたて

猶さらしおもふまゝにはあらしとて
左第下に詞とゝのほらしく侍り
右方一篇の風躰新しきうへに
中五文字の事させて侍り可為左勝
廿四番
左　持　権大納言
立田山こゝろのあらし秋くれて
来つらぬ松に声しくはえ
右　寂蓮
わかしとや風まん木のはさそふらん

ちとせい枕に音ここちたり
へいはとともわしろうて打みえしや
廿五番
左　勝　家隆朝臣
吹しからし風の草木にいのちなからん
秋にかくぬ秋のあはしに
右　隆信朝臣
山なけや音たつなはあらしまて
てもしさかりも身よに声ときかれ
嵐と吉川のなかりとよ然け浅守

やらん花の鏡なしとやとれかへ侍り
とよ

廿六番

暁雪

左 勝　　権大納言

日影さす山の窓はあけ方なりけれは
まと雲さへやはれぬあけの雪

右　　内大臣

影くもるわきてとやらの里と猶まして
雪の下にそありしなくなり

左は優に侍り右もさらの里な
そひと眺望の体やさしくて見え侍る猶
まさりもなくなりてそ上下とふた
ひて見え侍ると

廿七番

左 勝　　家隆朝臣

鐘の音とともにいまや明ぬるも山まして
あとを雲ふかしくらゝの声まくも

右　　左大臣

まへ深しかさなる雲の絶間より

月をむかふるのきのまへ
村雲あらしなきそのこゑによろ
しくこそみえ侍し

廿八番

左　勝　　定家朝臣

あきをねかふ槇おきし　ふけ松よのまへ
しくれしろこそむさからみのそ

右　　女房

すむとしも曇もやとせ風そよそ
雪よめかねあかりあかきの月々

左松よのなかりみてむれ波さ浪よ
此哥たく雑もすくれたと称んあらし
くや

廿九番

左　　雅経

月をいてくもりそてぬやを浦まこえ
雪の日よりもほりあまる月

右　勝　　前座主

秋よりも冬こそあらそまさりけり
月ゆりぬるとしは雪のあかりけり

くもりそめぬるやわかまりにかゝるむへ
ゆきとい雪のた前見えはしき歟之

四十番

左 持　寂蓮

あさ雪に来れ庵もうれしむそて
わきゆく隣のけふの村さえん

右　隆信朝臣

ふしくてくもの旅しき初雪よ
みつ残らく消え前まつ月
雪よ隠れんとするとしきさえみゆる

ねはいたなく何まじりも見えつゝしき
歟之に心えこくはなとはれ事よ
何とえうなけれは持なとゐや

四十一番

氷鳥

左　女房

月さゆる氷しまる波よけて
子残れりふきかゝる千明

右 勝　家隆朝臣

いそくはあさひさし何をとに

なをひとめうちとしの下忍ふ
左の五文字てあさにとなきと覚ゆ
にれかえ待まとこいもうりゆけいみてこそ
めてたくて侍しくや勝侍らん

四十二番

左 持　　前座主

鴨すむ池の急し浦の磯の松か枝は
波よりかゝるつらゝなりけり

右　　權大納言

なきぬなる夜かれぬるさ葉は風さえて
ひとつ氷やとまりあるらん

左右同科にや

四十三番

左　　左大臣

さゆる夜は山しわの鳥の声すさや
あかりのつらへは浪ときこゆ

右 勝　　定家朝臣

うき氷あるとし鴨のうはけよ
しもいつる波まの葦そみるふ
大かたゝしきさに海に侍り

四十四番
左 勝 寂蓮
なこまくら氷よさむくとし鳥や
心ひとつめぬらむことのみなかれん
右 内大臣
羽うちをはあらしにまかす波や
やそてきみけよりすとし鳥
羽うちするかたとそろとしく言葉
ことなとみるなよりきて左初七句
つきそてひらぬ松かえ侍まてはいきて
右はまさして侍らん
四十五番
左 持 雅経
あしかもれさえまよはつ波まくら
このへはのまのくらし風
右 隆信朝臣
さゆる夜のあしかれなくとさえはてて
湖白よいはしのあらしれ山しし鳥
ふるともあしうるを侍り
四十六番

庭松

左　持　内大臣

二葉よりそこやの山にいくとせか（欤）
玉松かえは白かりさしきふ

右　雅経

まさゆへよかすあそひぬるとて
とのもやとぬ籾の松風

左の歌すこしあしく侍る
右歌もひさしき援に侍
またも玉まつ枝万葉集とも侍

なほましてしこまきもうつへくて侍るとも

四十七番

左　持　左大臣

庭のおしもいそと松つき君の代に
松ひさふ松の木ぬそこもまる

右　隆信朝臣

契りあらは山への遠き庭までも
よろ代かけて松を移さむ欤

山へにとをしてゐかうつしくくも
此の手庭の木の由は勝つき様も

留なへし

四十八番

左 持　　寂蓮

あしふみれとしつゝ庵と問ひ来れ
形をとこめつ松風そふく

右　　定家朝臣

枝かはしてまれにミえける松の月
いくちよまてか契りをかむらん

左は庵もありけまほしと又さる
事かくや右なたらかに枝をとり持

ことにはいつもきこえ侍ると申し

四十九番

左　　家隆朝臣

よろつ代をおもしく庵の松かえを
みれはひさしき物とみえ侍

右 勝　　前座主

千代のつき光をおひ行末しれて
むしく庵に松の山しき

左万代をむしくと云る詞つゝき
ても見えしとて又右勝と申侍

右方ハ雅なく侍るめり

五十番

左　女房

こゝもさそへしなをやとれる月しらて

影をハすくはす松のきさの縁

右　権大納言

河竹はまたあさましとへしこそ雲ゐさて

千代ふさうしせやとれる松の縁

今世ふさの色まうしく侍り

于時文安二年十二月廿一日書写畢

右憲孝以自筆之本令書写之者也

慶長二臘月日

羽林郎某

判

御子左大納言為遠卿以自筆之
本書写之了

至徳二年十一月七日　左少将藤原雅俊

続哥合部類巻之十二

影供謌合　建仁元年八月三日

題

初秋暁露　関路秋風

旅月聞麻　故郷虫

初恋　久恋

作者

左方

女房

左大臣正二位藤原朝臣

續庫

内大臣正二位兼行右近衛大将皇太傳源朝臣
前権僧正慈圓
正二位行権大納言藤原朝臣忠良
参議正二位行左近衛中将藤原朝臣公経
従三位行式部大輔藤原朝臣光範
女房小侍従
女房讃岐
女房丹後
沙弥寂信
正四位下行左近衛中将源朝臣通具

散位従四位上藤原朝臣保季
従五位下行右馬助源朝臣家長
従五位上行隼人正大江朝臣公景
散位従五位下鴨縣主長明
散位従五位下賀茂縣主季保
正六位上行左兵衛少尉藤原朝臣秀能
右方
正四位下行左近衛権少将兼安藝権介藤原朝臣定家
従五位上守左近衛権少将藤原朝臣雅経
沙弥寂蓮

散位正四位下藤原朝臣有家
女房越前
女房宮内卿
従三位藤原朝臣範季
散位正四位下藤原朝臣隆信
沙弥釋阿
法印静賢
沙弥生蓮
正五位下行右近衛権少将藤原朝臣良平
従五位下守左兵衛佐源朝臣具親

僧慶印
正六位上行左兵衛少尉藤原朝臣景頼
正六位上行右衛門少尉藤原朝臣季景
散位従五位下中原朝臣宗安
武者所正六位上平朝臣景光

讀師　左大臣
講師　左近衛権少将定家
判者　沙弥釋阿　但於判者哥者衆議

一番　初秋暁露

左　持　女房

きのふまてかはらぬ露やのへにをく
秋はまたそかりなあつまれなせ

右　定家

夏と秋ゆきかふ空やかはるらん
かよへもしらぬみちしはの露

二番

左　持　内大臣

秋のきていくかもあらぬよ萩のうへ
おのつからつゆの袖にまかれぬるらん

右　雅経

夏と秋ゆきあふ空のあはれかなし
露ひとりかゝるしのゝめのそら

三番

左　持　内大臣

秋きてそいくかもつねに白つゆの
をきそてしらむしのゝめのそら

右

手ぬくのうしみいなしきねさりまて

露ならて花と枕はかはれともきりて

四番

左 勝　　　　前權僧正

秋こそてもなほまさしき秋のよすかよ

つゆをかもてしまあの乃うらに

右　　　　家隆朝臣

秋はこれ露の草葉よ花にそへて

我ゆへしらぬきえのわかれて

五番

左　　　　忠良卿

おもひかりそふまさる松かうへにむしのねは

萩の下葉をしをれぬの露

右　　　　女房越前

志賀のうらやあらくつきもなく風に

まきて秋たつやまの萩原

六番

左 持　　　　公經卿

あらし吹く夜も秋の露よそにぬれぬ

あけほのの松の霧

右　　　　女房三位卿

はなすゝきはからしもいくしけしつきの
むしらともわやし初秋乃色
七番
左勝　　光範卿
風のをとにおとろくのきのけしきよの
つゆのそくみも枝はしりきもつさ
右　　範季卿
鳥かねはきこていくのゝ淺茅生よ
つゆをよはにせきあけに路よそり
八番
左勝　　女房小侍従
しのゝめの露よおはれとさそふらく
しまゆやあさゝ白露しらのかな
右　　隆信朝臣
秋ふかくまく白露乃をきもおへと
か露よおちかのへ乃明けれ
九番
左　　女房讃岐
夜をこめて行てきる袖よ玉寄や
旅の枕ゝ結しかうらまん

右勝　沙弥釈阿

稲ふねし枕よはしらのをとゝよ
屋ゝくもかゝれそのつゆ

十番

左持　女房丹後

秋さうとゆふくれの空しづかなる
もゝ川行つふそ露は置けり

右　法印静賢

稲こねし吹露こそすゝ露月よ
あさらつ旅もさし北ゆく

十一番

左　沙弥寂信

秋さらくわろつきこそのしつ旅や
ますみのこゝ世わかなよそこらん

右　沙弥寂蓮

あさしねとうゝわしもわつゆ秋のそとよ
やくつ旅そくゆつゝ秋空

十二番

左持　通具

暁は旅のふしやにはよかぜねならむ

梅やとなりをへたつ志のゝかき

右　良平朝臣

くもれ紫のこゝろもれらしはるかすみ

色けさの花はちる志のゝめれ春

十三番

左　保季朝臣

梅香ねやにかほりひともおもひね袖さへあやな

袖まいつさりふ志のゝめれつ夜

右　具親

明わくらぬまもかりい春をとすゝのこゑ

ねやのうちもなきいのちかけりまてわ

十四番

左　家長

春のいろ雄乃日かけたのひさしふかみの

はな花花庭より鳴ことまさりて

右勝　信実朝臣

秋の色も待よしも見明ほのゝま

花を色みたえりゆきふ庭の萩原

十五番

左　公景

秋やらはたゞ梢や雨ふらでさそふらくも
まくらは志づくまでしのゝめの袖
景頼
右
きのふまで夏られたのをとゞめて
秋たゝしやはてをのむしもひくらん
十六番
左勝
長明
秋こまくもいくよなははまへ志のゝめや
とくよ志らつゆさ志れ家
右
季景

涼しさはまえすれむす秋風よ
明ぬもしぬもれの下つ程
十七番
左持
季保
しら露夜ぼの衣をしつものの
いたみしらん篠目の袖
右
家安
明ぼくは秋こそにきうと志て家よ
おきてつれぬゆふすゞの衣
十八番

左持　　秀能

真葛原霞たなひくしのゝめの
かすみにしられき松のうはかせ

右　　景光

梅はまたさえ月ふけてもわするなよ
いつしかなれし窓月の夜

一番　関路梅風

左勝　　女房

霞よりも月は梅さそふみかく
波よりくる関のせきもりたえ

右　　定家

風しらむ人めもかれぬすまの浦
をちかたさそふ梅のしつせ

二番

左勝　　左大臣

八人すまぬ春ものせられ杉扇
おきふしの枕にふく秋乃風

右　　雅経

行花しきはゆきとちるとみゆく
せきもりもみよ行かふ風そ吹

三番

左勝　関白

うら波のよるやみよりしさけのさゝん
んはらしのりしれ更ち

右　寂蓮

あやまこそふかゝらんあはれりなまよ
をふらちらく秋おく河の葉

四番

左勝　前権僧正

こよみかくさえりり波の坂れて息
あさやみやこの萩乃上の波

右　有家

白河の関乃梢の波さらかかり
いはおふ河よとゆふさの冬ぐもれ

五番

左　忠良

こよひみかくおもれのにほれとめてもて
せきもりなみまふての山風

右勝　越前

せれちのまくひとへうちあさ涼りてよ

いくれぬにあかりすむ月の秋のせき

六番

左勝　　公経

あすは家ゆくらん秋のみちのく

ともみちをわくる白川のせき

右　　家隆卿

秋へてもしくれん山路とたのめとや

おもひせぬよそね白河の関

七番

左勝　　光範

みちのくれ家の霞よ秋やこゆ

みこしられはたゆとすらんし

右　　範季

山路しもみちを行はふみわけれ

程ふみえぬ白川のせき

八番

左　　小侍従

吹すさふすゑはもせにむすふよ

秋の霜しほいとゝめかくた

右　　隆信

郭いつくかさなる山の松ゝのみどりよ
むかしの河となりらんの美

九番

左　　　　備後

春のゆく花をおもふこゝろし秋終の
せまりてもあつきの風は吹きり

右勝　　　　駿河

河しもあまの様の摂枝をとすき丸美
あかあしむかせ丸啼る声しく侶

十番

左　　　　丹後

家ひらきみやこもらるゝをいろ丸
いかにおもへはかはりの世さし

右勝　　　　静賢

あはれなるひとなれは緑あにほそ
ききみつせるをあてまさん

十一番

左勝　　　　寂蓮

屋しとほる夜のせみをけさてい
草のかけ添しき松風の吹

左　　　　　　生蓮
梅か香ハ家のせとまてさそふなり
なほ日かけしらぬひとの梅からハ
十二番
左勝　　　　通具
うちわたす梅か香さそふ春の夜のせき
あまさかる波のよそまてもとめても
右
すまの山莫ちらすすみたれふかく
みねのあらしの梅風そ吹

十三番
左　　　　　保季
おほかたは夜まての雪のをかしきを
わきやのとよ袖思ふらん
右　　　　　具親
春の梅の山風さそふあたりの梅も
声もなくすかたせしの梅もちら
十四番
左勝　　　　家長
梅か香の吹くるかたにをれらん

みやこ乃梅もしら川の花

右　　資文

けふしもおもはれかすみ松風よ
花とりもえぬわしるの山

十五番

左勝　　公景

志ら河の関乃秋風さそひ来て
みやこ乃そらに月日つもりて

右　　資枝

冬かすみたなひきわたるちりかえひゆく花

いなりしつ野辺ゆくしらぬ花

十六番

左　　長明

せきしられ志井くだちなき坂の
さとの秋の野辺彼岸しらし

右勝　　季京

秋は秋をすみの花ふれなれ
うら風乃なみの音まて

十七番

左　　季保

ふるさとはいさよふ月に浦さひし
あきの月たにしらぬおもひのせきさ
右　宗安
人こそあれ[illegible]くし深
きよみかせきよの林のゆふくれ
十八番
左勝　秀能
さとは山みねのあらしやかはるらん
せき月影すゝしく秋風ぞ吹
右　宗光

おなしくは雲かゝるみねのまつかせや
をのへの松に[illegible]秋風ぞ吹
一番
左勝　藤原[illegible]康
夜をかさね月に[illegible]
きつ[illegible]
右　定家
野辺の露[illegible]
いくしほや[illegible]月は[illegible]
二番

二番

左持　　　　左大臣

かくらにねよかり猶よ月をこゝろのく
枕にちらし花さそふらしあはれなれ

右　　　　雅経

草しげみぬる夜の花のまくらにて袖ぬれて
月なりしるくゆよの中山

三番

左持　　　　内大臣

よしのあさて吉野川へなのくれなゐまて
春かのこゝろを春なの月

右　　　　寂蓮

みやこ人はなにそむけてねかひまつま
ねらしそねものこゝろのはるなれ声

四番

左持　　　　前権僧正

草まくらねらしこの月をまつのこや
あひのかのひかりのあはれなきん

右　　　　有家

梅の花そらすはしのぬ枝ねは
ゆめあらかなよのゆめしらの声

五番

左勝　忠良

ゆらしほのきしのかりいほまなりゆく
まくらによちかくにさすゝのおと

右　越前

月はなほきこえのへの秋のよみかゝく
よふけゆくしき霜ねとおもする

六番

左　丹後

男鹿帰る山のはしけりくらはく

月かりをとふかきゆふくれのあき

右勝　宮内卿

月みえそめてあはれぬ涙にあて
もろきの袖をそれしらぬさそふ風

七番

左持　光範

月のすむにはの波風にいよふかく
秋の鳴音ぞ枕かり抜

右　範季

草むらのかりいねてし月のみか

流れゆく水まされて見えもせぬはし

八番

左勝　　小侍従

さつきやみくらひねのとこよりいつる

月やともうらふきされしかれし見ゆ

右　　隆信

月みくはねくさみゆつき鶏なかて

うち絶ていもをまさしるしかれ声

九番

左　　讃岐

をまなしらの月秋のね月ゆくえに

をくさわけのしゆしもの山

右勝　　頼政

試しも篇わしれ月のあり明かり

うしろもとそらのきよくまれ見

十番

左勝　　丹後

むらくもの晴くして来秋の色りしく

あれまの月のみさと神のみのれ

右　　静賢

いまそ知るはるは雨こそ桜のいろよ
松ほとよ志りのこゝろをさそふなる

十四番

左持　宗信

あさひさす峰の山に桜のしく
月をうけて光をとゝむらん

右　生直

夢ならしくれきその乃ひかり月のまよ
むかしおもひ桜をまきそめしのこゝろ

十五番

左　通具

桜乃色にそまりていとゝなかめ月の夜ふ
あはれ雲志りのこゝろのこゝろさそふ之

右持　良平

志ら雲の桜そ我をも友よ哀とや
春ぬれくみつねよ花物つらん

十六番

左持　保季

月をみく我をと出し河雨しよ
花りしまくのさそふしる色

左　　具親

わけしらぬのべのみちの庵ねよ
草のまくらにやどる月

十四番

右勝　　家長

月のもるむかしあれにし宿にぬれて
かへるのこゝろも袖をぬらすと

左　　定家

宿しらず猿の声の床よりけりと
きゝてよそにしらぬ萩のうへ

十五番

左勝　　公経

しのぶるや猿ねの月よねゝおひて
いつよりか庵のしるしゝらん

右　　家衡

月かよふいせのはま荻かりしかば
むかしもかくや庵のなみだん

十六番

左勝　　女房

草のゝしる袖とおもふさむく

月よ庭くもれさやしきのへ哉

右　秀景

いかにまつぬるそのしも風京月さひく
さらしねおまりよ庭の月さらさ

十七番

左　秀保

庭の月をさそ花のくもよ出てて
ふかきしらぬ月の月

右勝　家安

月はうすと都もすさまじ草よ海らく

かりかねもこさしし庭のへ哉

十八番

左　秀能

草まくら月はかりける神の前や
ふるさとよぎりさびしの哉

右　家光

まはぎりの上にさらに沢月の
あられねくぬりさびしの哉

一番　勝虫

左勝　女房

花鳥のあとをとふ宿のこゝろくて
月やむかしわすれぬ人

右　　　　　　　　定家

むかしをも思ふ里の浅茅生に
いつはりや人をまつむしのこゑ

二番

左勝　　　　　　　左大臣

ふる里の風よりかすみやの梢にも
きかれこそてみゝに松虫のこゑ

右　　　　　　　　雅経

おきまよふて帰るさのこゝろくて
その夜なからひとしれ茎よせれの宿

三番

左　　　　　　　　内大臣

むしの音をかれゆく秋のこゝろみて
ふるみすてゝけふ浅茅生の里

右　　　　　　　　寂蓮

結ぶねしゝやとむしのあさらの
君まれとしつくり松虫のこゑ

四番

左勝　　慈圓

古ゝの梅のゆかりのせ見まてそ
みかきりゝ乃まつむしのこゑ

右　　有家

おもねかりさら絶ゝし忍ひかれや
雨かれのくゝ乃ちのこゑく

以番

左　　忠良

いくよへてむしの音きけくおもはれん
萩の下乃梅のゆふくれ

右勝　　越前

さきれこそあはれなかの袖もまよ
了ゑかりしてて絡むしの何

六番

左勝　　丹後

故ゑくいくよ忍ねかゝ里よ
むかしお月招かつむしの聲

右　　家隆卿

古ゝの庭よそてきりねむしのこゑと
かきりんやかハ常よ涙かせそ

七番
左勝　光範
吉野乃山はゆくとしのはれ
こゑしけきのへにかへるけり
右　範季
ゆくはるの人をとゝめぬ花郷に
ちるの花をさくらの手にさくれ
八番
左　小侍従
むかしをゝしむ涙にさくらぬれを
あをみえぬ花ににほひくすれ
右　隆信
たちしやられたる花をと深草の
野とになる里はまつさのこゑ
九番
左　讃岐
散ひらるもあすしりぬとは梅にて
人まつしのうくきすらん
右勝　親行
むかしたに雨もふるのしと如よ

やまれまつむしのいはまも鳴らん

十番

左 持　　　　　丹後

古郷の庭をハ野へとうちすてゝ
むしのねのこゝろやりするらん

右　　　　　　静賢

古郷ハ庭のむしろ乃あれまくも
うすはなけてねるむしのこゑハ

十一番

左　　　　　　寂蓮

あさち乃庭ハうちとまされ古郷よ
むしこそ共にほとむしのこゑ

右　　　　　　生蓮

古巣の我しと虫ねかなきしなく
なかはわしめりと松むしの声

十二番

左　　　　　　通具

あきまよ露のすゝしのきりのきりきて
よりけりかはらぬ秋のあはれ

右 持　　　　　良平

いりえしくのこほりのうすらひかく
むしのねよはるのけしきとこそなれね
十二番
左持　　　　　　保季
志かのうらのさしもしらしのさゝなみそ
をちかたよ花の色かけりけらん
右　　　　　　具親
はりまちのたかさこ松乃かせのおとよ
むかしよりねられぬ枕にたえぬ
十三番

左　　　　　　家長
をちかたは色もしけきもなかりけく
むしのねのしけりのとこそなるらん
右勝　　　　　　宮内卿
さらしなのなかき物とよ右郷に
まちかねやうらひのまつしのこゑ
十四番
左持　　　　　　公経
かりへそのくとなくなくはすそとく
あかりゆく田のすれはむしのこゑ

右　景頼
あきかせの君のおさ地よみうせねと
むかしうしられ野ちの色
十六番
左持　世明
従すらく人のられおしおさ地のよ
そとのかしらせる松ちのこゑ
右　季宗
ふてみれはこそしなのとみやこ
庭のちりにてよちれて思ひのこ

十七番
左持　季保
古郷は野京の庭れものとみゆく
かきとんおる松むしの声
右　家安
宿は荒て庭はのへなる故郷よ
おもしと葉らくせれ徒らん
十八番
左勝　秀能
いつまでと跡らへともら出なへよ

うつる夜すゝしき松虫のこゑ

右　　家長

ふけゆけは月の秋は音つれなく

むしのねさひは松むしの声

一番　初恋

左　持　　女房

移ろはすよ忘られいとてもくる家

かゝしくみての打志のまて

右　　定家

我恋はきみに初時雨のうつり月よ

かきくもり紫の雲れ一しかは

二番

左　持　　左大臣

すゑの露きえりかの袖ならすまでに

むすふおもひをとふ人はなき

右　　雅経

世をうらみやみ人よりの心をまつみ

うきくもあるね袖のうら風

三番

左　持　　内大臣

わすらるゝ身をしる袖れやさは
あやしかりけるわかれかな
右　　寂蓮
さりともとおもふ心のにへとかりまえの
草のしけみかしらかれつゝ
四番
左勝　　隆信
ゆくすゑをおもひやるにもさきたつは
涙なりけり袖のみかは
右　　有家
いはしかとおもひきこえたのしいは紅の
ならぬ色かはめのしれをみよ
五番
左　　忠良
思ふ事もしらせよ涙をそのみて
わすられぬ袖をしほりわかぬる
右勝　　越前
我恋はあさゝの沼の花かつみ
かつしる袖のしほれかぬる
六番

左　公経

花のみかきてちよらかしこへの
しられ雲袖ともかあへそ

右勝　宮内卿

まくらしれゆかしにひかりこす
ものやおもふと人にとはれん

七番

左持　光範

ゆかれ花のちりしをとふ人て
ゐのをよきけしきせよかし

右　範宗

こゝろありてなにさそふらんはるかせや
わかやとをしもよきてちらなむ

八番

左　小侍従

物おもふ人は涙のなかれかは
思ひけるかな人にしらせや

右勝　隆信

しかまつとて風のおとにもたのめとも
松縄もなくしほのこゝろか

九番

左　　　讃岐

しらつゆもひかりそへたるかけそよ
おりひへまてみえしやまかせ

右勝　　季経

松かせのきよきかすみのかけうつり
かりそめのとをさひのゆく末

十番

左持　　丹後

いにしへかおもひあかさんよひくもの

なかよみしらしい我そうれしき

右　　　顕昭

おもひねのゆめもみえしやわかなかり
いはきの絶かあふさかれせき

十一番

左勝　　家隆

ほのかみていかくしてもあかすまて
うらいまくるそかくらむひのうけ

左　　　生蓮

あまれしらひもかくしをよしれしれ

あしくならん人の心も

十二番

左 勝　　　通具

恋すかやいは花すゝきの袖乃つゆ
いまはれくらしなかくらん

右　　　良平

さればふまてかくやは袖のしほれかし
あやしや露の下をれまて

十三番

左 持　　　保季

さしつらし歌こそあれとみゆるより
られめる雲のふもとねに

右　　　具親

人しれぬおもひとはやあはれならん
家あふるゝこそ恨みなからまし

十四番

左 勝　　　定家

きのふまで春つゝむとやおもひけん
夏をしりけるのあはれなりしか

右　　　家平

せりくさもしぬるの淀川
いはしりの袖にふかるかとも
十五番
左勝　　　　公実
さえわたる空にみだるる初草の
きえつかりけりて猶やらん
右　　　　家経
このあはれきみふみわりしる九重の
わするたえりのちまりなし
十六番

左　　　　　女房
来日神の宮もなし　　　　　　　　　勝
なれえぬるとての　　　　　ならの家
右　　　　季経
恋草の程なりしる種をりかへて
いはしりてよしすつ菊
十七番
左　　　　季保
いまさらにあひ見しくもかへりて
なきぬまでかぬ袖の玉水

右勝　家長

みかりのつけさくらもしけり恋草よ
いはしのゝ婦かむ袖の白露

十八番

左勝　秀能

人しれぬ涙はせきつ袖しほれ
いはしの袖の色そ出にける

右　宗光

恋しらぬ思ひありとハ知りなからよ
中々にまたかくるゝ袖よ

一番　久恋

左勝　女房

いはぬまをいつしか計とたのみにて
いくせ月日をすくしきぬらん

右　定家

恋よとてせぬまの松の山ハゆかりそ
ゆめとはかりしひとしらすぬる

二番

左勝　内大臣

難波人いかなる恋に朽はてん

あふくなりみよ所とはくらして
右　祢宜
年たけむかしきりも桜りきて
あひしよりわかれ待
三番
左勝　内大臣
あらさ明しむの
あむ世れをてよいかな
右　宗尊
浮かれ心さりくしのかな

としふつわまもかな
四番
左勝　宗権信正
悲しさてとしもたえにみくら内へ
うしのを明たかみまことにけり
右　有教
去るもわやいたくり神のかれ給あて
きふいくつしま待をてかん
五番
左持　太良

いくかへり涙しくれて松かさくへく
さえしぬなかれのきを添ふらん
右　越前
夏河の手ひきの糸の年へても
たえしぬありひよしすかれて
六番
左持　　　有経
まちわひくみとせまろ床の上に
狩くらしぬい枕みてかりもさて
右　家隆

あみうしの千草の花にわすれして
名しるさをきり秋をたにみよ
七番
左　光範
逢事をいつやくとまつ川山岸
まつかくのきやせをいふくさん
右　範季
むしくらもいつも袖をしほりつつ
みはわらむもみてま雨もりもうた
八番

左　小侍従
いはまくらはらふたもとのしらつゆを
ゆめむすほれぬ我いのね
右勝　讃岐
なや　あさむらのまくあはしかはらく
なかくも乃袖かな
九番
左　讃岐
契りとそしらのなし
袖より我名もらしやはてん
右　頼政
契りしなをいとこのまゝ
なり　露草のうつるまても我まちあらは
十番
左持　丹後
百夜ともしらのまゝ人の身のかよひあまり
いはわかちひとり涙なかるらん
右　静賢
あはひさへわかのうらみてみしへは
色の波まて袖ぬらさんとは

十一番

左持　宗信

さくらちるをまつとせしまに心ては
いのちとゝもにちりそはてなむ

右　生蓮

ゆくいほの井のつまをみて苦しかり
とかりつむまてをのか心を

十二番

左勝　通具

年をへて波のみかよふ志賀の浦の
しらねは悪の心なりけり

右　良平

人心かはるのはなりけりしあれ
いくとせをへてちる果てかはらん

十三番

左持　保季

年経ぬるはそのわ　さくらく
ひとりしく庭に萩のはな風

右　具親

ふもとにもかゝる秋風ひまなく

はまちかしとやいふさいかへき

十四番

左勝　　家長

くもゐ山ふりしくゆきかみのかへく

りゆきいひうわしなり

右　　宮下

年をへてくなり　ちよのくへの

雨もしもゆきとくゆきや果ゆらん

十五番

左勝　　左京

すみよしのきしの姫松なれなくて

いく世か神はたむけをかくらん

右　　家衡

いくせむもしぬる忍をとなり

やそせのなかみゆくてよなり

十六番

左持　　長明

岩のうへの白絹いなり

おかりふなり

右　　季家

いくとせもなを まさきにとて
ちすかつねかはれやはかなし

十七番

左 勝　重保

波のこゑ嶋つの松杉いく世へく
ゆくらさしきかれなとおもふらん

右　家安

月かけのきよくひとしき秋風て
つれいく人の老となりけり

十八番

左 勝　秀能

なし　あすりひろめてもなし

右　京光

なし

續哥合部類巻之十三

禁裏御相侍臣詞合　建永元年七月十五日

題

朝草花　海邊月　羈中暮

作者

左方

御製

内大臣

前大僧正慈圓

前大納言藤原忠

續庫

左衛門督源通光
中納言藤原公經
權中納言源通具
参議藤原良平
正三位藤原季能
俊成卿女

右方

宮内卿藤原家隆
大藏卿藤原有家
左近衛權中將藤原定家

越前
左衛門少尉藤原秀能
右近衛權少將源具親

丹後
散位藤原保季
小比叡禰宜祝部成茂
左近權少將藤原雅經

講師 缺
讀師 缺
判 衆議

詞霞筆

以後日被下之

一番 朝草花

左 勝　　御製

横雲乃たれこめし山の花の色を

まさりもみえてあさしほに

右　　宮内少輔家隆

ゆふ神なけきさむへかへるをしかち川

ゆくへの野の萩露にそある

左右よく詠出侍れはよくもあらね

争侍るおもひわ判の詞き

侍くつゝへくよしあひ侍れと

とりわきて書付侍りける尤哥ざりき
旅あらされ風よしらけりぬへし
なしけれ侍しかや
右哥ゆゑての心なくしをかし
きこゆるけれとも又哥様事にて
左乃勝りなりけり侍りしぞ

二番

左　　　　内大臣

なつ衣よ秋あはせる袖をいさしるぞ
尾花も露そあさき物いふて

右　勝　　　大蔵卿有家

小萩原をれぬつらの花野ゆく人
ぬれまさぬ袖は佗しき色乃秋風

左方申もなし右方申まく
色すてにあきてよりあるの右

為勝

三番

左　勝　　　前大僧正慈円

朝露のよあるましくいつ乃秋よあれて
きる袖らはら萩のうへにそ

右　　左近権中将藤原定家

ゆさ[illegible]くてもよはと萩の葉に
露おきそへてこそおもひのこすらめ

右方申云頗宜之由申之
左方にはやいさゝかなかるへし
やすくもあるましけれとも秋の
一家所ありの為勝

四番

左持　　前大納言藤原忠良

里はあれて雨ふるにはへの小萩原
あさちふもしをれてみゆる雨

右　　越前

はつこゑのならしし首の緒にふ夜[illegible]
あはれとはひとりはきゝ[illegible]
左方より難申ていふことはあるらし
郭公さてみへし　右方よりみな申之
いふことはあるなるとこゝろはへ
ひかりの為として左方陳申歌の心
あはれ廉こそみえ[illegible]

五番

左　持　　　左衛門督源通光

あきかせとて耻色しら山にいつ露
ませかきをこゆる萩の下かせ

右　　左衛尉藤原秀能

こ萩原なにゝらみをむすひてむす
うつろひ出けさのあさ露

左右ともにきこえしかれ左方煩
やはりきさ海なれはけさ乃歌君

云衆議之定持之

六番

左　勝　　　中納言藤原公経

秋風乃錦ふかきそふくとみえなくも
きゝあへぬ思ひ乃そのれおこわりて

右　　右近衛権少将源具親

はりしられぬ家のしすゑにかのく
あきかせの東乃萩れはまさる
たちより上句こそなれもれるよし

左之右方云申旨

七番

左　勝　　権中納言源通具

野寄もの心ことにかゝりけり
為以波の勝やまさらん
右　　　　丹後
花ゆくあらしの原の秋萩を
寄のこゝろへきゆらやいみし
右方より申云花乃えんゝ草も
頗可悪乃花与詞かゝり乃深く
見えぬと申す一首秋ともか
月夕物なり　左方陳申色をも
ありゆきうらまずてまゆあら

一首乃たなみさの勝やまさらむ
なとはおもく様あひなきれ命
左の字はやしの風なら花も志
ゑことれといふなるよしと之
八番
左　勝　　　　参議藤原良平
小萩原けさとく寄乃色しく小
ひし悪しき袖そら河ふ
右　　　　散位藤原保季
なく為乃秋半の波が行暮の

わかしこ萩原の萩はしるしき哥
右方のしかにも旨はし左方ニ
出てこそよろしけれ

九番

左　勝　　　　　正三位藤原季能

朝露の玉しく萩にはまかれて
うつろふさへ咲く家あさしの原

右　　　　　　　小比叡禰宜祝部成茂

佃もなく露消えてうつりをさなみ下
手をれみつのきはのはなれそ

左方申云為されあわれうきてに
ち右方よりのせ侍申旨なし

十番

左　勝　　　　　俊成卿女

あまねよれなきてやむすふ萩の露
ゆふ露の神の庵ハ思ひ祢し

右　　　　　　　左近衛権少将藤原雅経

秋はよりさをや影の影日を
うは露の露に白なる萩かな

右方より申云頗つうなり左方

中なともやさしさらまたまれなとも
根あさね夜君頼笠中さら

十一番

左　持　海邊月　御製

わたつ乃山人今宵あかしまん
まつ明浦沖の四方の月

右　家隆朝臣

鳩乃表君月やとう須礼おなの京
明なこち汐沖のはなるに
左方より中月やとう須礼おもの

京も先つし勝つきより中紡ら
こさおめれ於梅り爭紡るぅ初月さ
たりお宮之

十二番

左　勝　内大臣

有明乃月ゆきさそし海らう波小
きりはましたさき海士乃りかし火

右　有家朝臣

お月らふ於梅あり入しすみる多う
月さきよみる海の松かぜ

左方申云知ほとさみしいふ文
字うれしくなし右方申ひるゐ
なきなり

十三番

左持　　　　前大僧正

和哥乃浦小月乃てしほのさす每に
よ每なくは家の歌をぞ出す紀

右　　　　定家朝臣

りし和波池の月影をのつゝ経
よ移にかうさぬ清かの海人

左右両方冥之由各申之

十四番

左持　　　　前大納言

海辺乃月をあはれのかたみにて
なみに秋なく浦のこゑの風

右　　　　雅家

あきとへく年もはりかれさる風に
らりぬ月をいく夜かみる哉

右方こりれなるひさゝちうみさき
よりや之う乃みへたなうら名所

あまりあかりてふかくてあかしに
殊あかくしかるに當時一見候得は
其て詠せられたく歌やとも能え
當座にはなきさみかれ申陳申ふ
及なとも右方より左方歌をれい
さて勝申つきよし申左方申云
右方末句順説言ともみえ侍れは

少

十五番

左　　　左衛門督

月やとなりしか代神をとなとは
ゆめときへよ清との御沼

右勝　　　藤原秀能

あしかゝ路をまきくの神をみよ
す濡み月毎やとりのかは
左右方よろしきこよ各申之礼
右末句詞優なりの可勝之定

少

十六番

左勝　　　中納言

なるかやはらいつくかかるかし
り侍らすやまてすまの月にも
右　　　具親
月乃あきハ名のミそ秋の原露を露
かくら紀をまてゝこそ蓋もかす
左方申のしかや草せんなし
うくかなしりつましくても一所多し
侍りなむ右方申すりのまし
すまより通る左源云まさしもへそ
八雲月乃かすも京侍へ第也

十七番
左　勝　　　権中納言
詠ち浪そこ秋は袖の浦乃
月やはほるきあはきの塩か霧
右　　　丹後
引残のぬをや海の海士の袖まても
やとりやをはそ涙ろうよそれ月
左方申云へかゝに秋も此よ
うまきもすゝてあれる夜乃月
願悪れ方まてよう思ふ哉

右方申旨

十八番

左持　　参議

あさりする海士のぬれ衣
みなれてやとる月に

右　　保季朝臣

置つゆの情も月のすゝしさに
ふなれあまりの袖にふるゝ哉
左方申云つかひあさましきみなれた
なまてそといふる上日れりの

宮れとたゝしき[illegible]そかし
哥よもいきて[illegible]
和[illegible]詞にあさましき[illegible]
しかうの[illegible]右方申云又右方
不足云れさしやの不能勝負云々

十九番

左勝　　正三位経

花とりみつ袖こそあ海よかなしくれ
よ海の秋の月やあまをぬつ

右　　祝部成茂

あまの河うきゝのなみをすきて
なみよの月にやまとしまみむ
こかなかにあかしにかよひきれ
やとりはさよかはつきなかにうき
みかきもちてきてよるよる

次番

左　　　　　　　　　　　　俊成卿女

人もなき浪のよるにはいつもとも
月にあかしなかのまつ

右　持　　　　　　　　　　雅経朝臣

星のあまのかはそてもきぬきをみむ
思ひの浪をあらいての月
たかさこもさかりのはかなしきさき
なりそめるさきたちゐのこほる
けり

次一番　　羇中暮

左　勝　　　　　　　　　　御製

なくさのつきの月さえ山をまてなき
ゆふくれの風かはしらむもとに

右　　　　　　　　　　　　家隆朝臣

むかしおもふこゝろありて花のねに
今年の春はれこゝ山の霞
左方よりよりしきりよし申き

第二番

左　　　　内大臣

ゆみちかれぬ山の岩根の夕霞よひ
さゆしも色の岩間の水

右　勝　　　有家朝臣

秋人をのあぬりの紅まつら山
ゆふこえしかねてむかしかす霞む

左方申云浪よりきこゆれなる
右方申云句おありにふ同然し
忘れそうりきよしゝ之右方
不中云夕西にひきてなれ芳

第三番

左　勝　　　前大僧正

ありひねのきされ秋しまさひぬめ
みやまかけは吉れ山りし

右　　　　定家朝臣

きのふてれ東の原野のわきされ

こまれぬうちにあらしふきけれは

右方宜しと申之

廿四番

左　前大納言

都おもふ涙も猿のさけひなれと

雲より峯にかゝれの空

右　隆　雅前

都にも又ゆふいかに雲にやとりぬく

みやこ人はをよ川の山風

右方殊勝の由なれとも以て

ふむきに定持

廿五番

左持　左衛門督

くれまさいつくに扇をとりぬもく

峯にわけ行神乃杜さり

右　藤原秀能

草枕結ひて乃こそを人のつてく

なれてしたをよ袖うつ乃霧

左右ともに持よりきよし

各申之

廿六番
左　中納言
しられぬやわれもまちきれしよひのまをらん
いくよもたのむ人はまつらん
右　具親
かくれとて紅葉も川に移るとも
さそふみたけき道のゆくへ
右方申云先つ引さむる
廿七番
左　権中納言
やとれた宿にくこゝに見え雨ふる
ゆふさね雲の風の音ゝ那り
右勝　丹後
野さはつよえこてきこゆさら紀
なすふうるそら舞ひのよそてと
右方申云由かるさね松の風ふる
を様か河ね律左方陳云莫とと
様かさねたる事あらは受え
右如や左方申云右方両方此受
のたゝいあ後はえなるへと

ちるかたをみるにつけてもいとゝしく
さそはれやすきはるの山かせ

六十八番

左持　参議

とはれぬもなにかうらみむ山里に
雲ゐにかゝる秋のなかの月

右　保季

うはの空にやまのはならぬ月かけを
むかしをしのふなくさめにせむ

左方申云、右ハ麻すゝ云々、右方申云、末句又
ひけにもちかくぬる人のことく
に候

六十九番

左持　正三位

露にぬれてそてもやとるぬれのゝ
草にこそあれさてもみにしまれ

右　祝部成茂

み山をへて秋のかせもすゝしくて
あさふりのゝ月のみそなかめ

左方申云上句にてありけれは
小束に梅やちらん之花右申云
右方ハ三句たる不審なりけるに

三十番

花　　　俊成卿女

なにもあさきはいろへとかゝるかそ
うつゝのことをいはゝとのゝ京

右勝　　雅経朝臣

みよしのゝ山のあさやあさ霞の夕煙
雲にかゝる櫻かすむまれ山

左方錦よりきて織しやう之ちられ
ことも花何やあさ梅乃といへる
ちしむかに可勝と云ゝ之

110X
646
8
3

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三千石

[illegible] 佐渡御[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]